【262】

氏　名(本　籍)	田中奈美(茨城県)
学位の種類	博　士(デザイン学)
学位記番号	博乙第 1,195 号
学位授与年月日	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	レジャー環境計画に関する基礎的研究
主　査	筑波大学教授　工学博士　土肥博至
副　査	筑波大学教授　工学博士　冨江伸治
副　査	東京工業大学教授　工学博士　渡辺貴介
副　査	筑波大学助教授　農学博士　鈴木雅和

論　文　の　要　旨

現代のレジャーは人びとの生活の中で多様に展開し，その傾向は社会的状況の変化によって強まっており，生活の中に占めるレジャーの比重は大きくなっている。しかしながら，レジャーとその環境の問題について包括的になされた研究は全くなく，レジャーが社会的に論じられている割には，そのための場のデザインは研究の対象として取り上げられることがなく，その結果，レジャー環境の計画論はこれまで構築されてこなかったといえる。

本論文は，そうしたレジャーに着目し，それを人びとの生活全体にかかわる自由で選択的な活動として幅広い概念で捉え，その本質をいくつかの側面から明らかにし，今後のレジャー環境整備計画への手掛かりを得ることを目的に行われた一連の研究の成果をまとめたものである。著者は本論文において，レジャー環境は従来の生活環境や行動環境と別に存在するのではなく，重なりあっているものであり，したがってレジャーの視点から環境のあり方を捉え直すもの，という独自の立脚点を明確にしている。

論文は 8 章からなっており，最後に補論 A, B がある。各章における考察内容を要約すると以下の通りである。

第 1 章は論文の導入部である。まず研究の背景として，レジャー・余暇生活の社会的状況，政策や制度の現状を述べ，研究の社会的，時代的必要性を強調している。つづいて，研究の目的，用語の定義を述べた後，研究の方法として，レジャーを人びとの意識，行為および環境の 3 側面から考察すること，3 側面相互の関連性について分析すること，仮説の検証は実証的方法に徹することを述べ，研究全体の枠組みを提示している。さらに，社会学，都市計画学，建築学のそれぞれの分野の余暇・レジャーに関する既往研究を精査し，本研究の位置づけを行っている。

第 2 章は研究のもっとも基礎的な部分であるレジャーの概念の明確化と人びとのレジャーに対する意味づけ，すなわち意識の側面を扱う章である。レジャーの概念については，フランスの社会学者 J. デュマズデイエの提示した，休息，気晴らし，自己開発をレジャーの本質的機能とする理論に依拠し，これを意味づけの角度から，休養，遊楽，創造とすること，これらの意味づけは同一のレジャーの中に重層的になされることを明らかにした。つづいて，意味づけの重みの違いに注目して，レジャー観という概念を示し，さらに具体的なレジャー種目を，意味づけの傾向から，4 つの類型に区分している。

第 3 章では日常生活におけるレジャーの位置を明らかにするために行った，行為理由調査と生活時間調査の結果について検討している。前者からは，あらゆる日常生活行為に対して多少ともレジャー的理由が述べられ，後

者からは，レジャー性のある行為に費やす時間が1日の1／3を占めることが示され，結果として，筆者の，レジャーは全生活におよぶ幅広い活動で，生活の中での重要性が極めて高いという仮説を裏付けている。

第4章では，レジャーを捉える第2の側面である行為の特性について論じている。様々なレジャー種目について，それを行う際の頻度性，場所性，装置性に着目し，親近型以下4タイプに分類し，各タイプの行為特性を明らかにしている。

第5章と第6章は，レジャーの第3の側面である空間的環境を扱っている。第5章は，住宅地や都心地区から農村や自然地区までの，レジャーが行われる可能性のある多様な空間48ヶ所を取り上げ，それぞれの場所について用意した物理的空間特性測定指標にもとづいて計測し，そのデータを解析したものである。その結果，垂直方向の開放性ほか4つの主成分が得られ，49の場所は，広がり，囲み，覆い，稠密の4タイプに整理されることを示した。

第6章では，前章で取り上げた場所について，スライド写真を用いたSD法による心理評価実験を行った。その結果非常に安定的な評価構造が得られ，また第1，第2軸がそれぞれ休養性，遊楽性を表すことが確認され，空間がレジャーの観点から捉えられていることを明らかにした。つづいて心理評価と前章の物理的空間特性との関係について，回帰分析による検討を加え，休養性には建物が，遊楽性には人間の存在が深く関わっていることを示した。最後に，物理的，心理的両面を含んで対象空間の分類を試み，開放的休養型以下6つの類型に分けられることを示している。

第7章は，第2章から第6章まで，個別に検討してきたレジャーの意味構造，行為特性および空間特性の相互の関係を検討する章である。まず意味と行為の関係分析から，行為の互換性という概念を導き，環境条件と意味づけの関係の分析から，意味づけは環境条件に左右されない安定的なものであることを示した。ついで行為特性と空間特性の関係を分析し，空間的類型のタイプによって，可能となるレジャー行為の幅に大きな差異のあることを見出した。最後に，3側面相互の全体的関係を3角形の構造図式にまとめ，意味，行為間の互換性のほかに，行為，空間間の規定性，空間，意味間の触発性といった関係概念を明確にした。

第8章は論文のまとめの章である。1節では，本文各章における知見を簡潔にまとめており，2節において再び3角構造についての考察を加えるとともに，これを今後のレジャー環境計画の基盤となる枠組みとするための図式化を試みている。3節では研究の今後の課題として，レジャー観が現代における重要な価値観の1つであることを明らかにしたことを受けて，レジャー性の高い生活を可能にするための人びとの意識についての更なる探究，本論文で用いた類型化の枠組みから外れる行為や環境の計画論上の位置づけの明確化，具体的で実際的なレジャー環境計画方法への接近，の3点を挙げている。

補論Aは，レジャー環境整備計画についての試論を展開したもので，レジャー空間のタイプ別に，どのような整備の方向が必要であるかを，かなり具体的に論じており，試論ではあるが十分示唆に富むものといえる。補論Bは，本研究と併行して筆者が行ってきた，現在における実際のレジャー環境整備状況の把握に関する研究成果について，関連研究として掲げたものであり，筆者の研究の幅の広がりを示すものといえる。

審　査　の　要　旨

生活の質の向上が大きな社会的テーマとなってきた1980年代以降，純粋に個人的な関心にもとづいて行われるレジャーが人びとの生活に占める比重は大きくなる一方である。しかし私達をとりまく現在の様々な空間的な環境は，近代合理主義的な価値概念によって機能別に整理されており，個人の自由な活動のための空間は限定され，レジャーのより豊かな展開を制約する結果となっている。

著者はこの点に着目し，レジャーを個々人の価値観にもとづく自由で選択的な幅広い活動と定義した上で，日常から非日常にわたる現在の生活環境を，レジャーの場としての視点から捉え直し，そこから新しい環境計画の

方向を見出そうとしている。この気宇広大な研究の構想を，観念論の方向に進めることなく，一貫して手堅い実証的な方法で取り組んでいることが本論文の第一に評価できる点である。

また，レジャーを行動面に表れた表層で捉えるのではなく，レジャーを行う人びとの価値観や意味づけといった意識面を明らかにするという，より本質にせまるアプローチをとっている点に独自性を見ることができる。つづいて，この意識に加えて，行為上の特性およびレジャーが行われる空間的環境の条件という3側面から，重層的に分析する方法をとっている。その結果，各側面からみたレジャーの姿を浮き彫りにし，さらに3側面相互の関連性を探究し，最終的にレジャーをめぐる考察に欠かせない枠組みとしての3角構造を明らかにした。

研究の遂行過程においては，分析データ収集のために多様な方法にもとづく調査を繰り返して実施するとともに，高度な数理的解析手法を駆使して，仮説を着実に検証しており，著者の研究遂行能力が非常に高いことを示している。

本論文は，骨太な研究課題の設定とそれに対する意欲的な取り組み，課題にアプローチする際の視野の広さと研究方法の選択にみられる柔軟性，仮説検証にあたっての慎重さと論理展開の明快さなどの点で極めて優れたものといえる。とくに，意識，行為，環境の相互間連構造を明らかにした点は，この分野における今後の研究の展開を可能にする強固な基盤を構築したものであり，環境計画の分野に新しい研究領域を開拓したものとして高く評価することができる。

ただし，本論で示された環境計画への指針は，いわばレジャー環境に関するマクロな計画論であって，個々の具体的な環境の計画手法，すなわちミクロな計画論の構築は今後の課題として残されている。

以上の諸点から，本論文は，独自性の十分な研究の水準に達しており，環境計画の分野の研究の発展に貢献するところが大きいものと認められる。

よって，著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。